

島田正治

十月十七日は、メキシコ市の日墨協会内で恒例の秋祭があり、日系人メキシコ人その他、約四千人の入場者でにぎわった。各県人会のメンバーが腕を競って日本食、手作り風のもの、また民芸品などを売った。日本の週刊誌、月刊誌も並ぶ。わたしどもは京都クラブに属しているので、このテーブルの上で開店した。昨年と同じ白いボール紙を短冊大の大きさに切ってもらい、これを紐でぶら下げるようにし、ここへ筆でいろんな字を書く。例えば「夢」「花」「愛」「平和」など。買ってくれた人には名前を聞いて、その音だけをとって漢字とカタカナで書いてあげる。いわゆるその場で書くので席上揮毫と同じ。一点二十ペソ（日本円で二百円）で安く、飛ぶように売れて行列ができるほどだった。用意した百枚は完売した。日本の文字はメキシコの人たちには人気があり珍しがられる。

翌日、メキシコ市からバスで北方約百五十キロメートルほどのところにあるバイエ・デ・ブラボーへ出かけた。ここは以前には何度も描きに来ているが、家内は知らない。それでも二十五年以上はきていなかった。

三十年前になるが、この町で一度個展を開いたことがあり、思い出の場所でもあった。メキシコ市からバスで三時間はかかる。小さな湖があつて観光地にもなつて、週末は若者でにぎわうという。昔、ここに京都出身の若い陶芸家の松本宣夫君が住んでいて、いいところだから描きに来たらと誘われて行ってみた。かなりの山奥だが風光よく、湖に面して町があり、白壁に赤い屋根、急坂に何軒もの家が建ち並ぶ。この町にすっかり魅せられてしまった。

松本君の友人がこの町の郷土館の館長をしていて、またギャラリーも持っているので展覧会を開かないかと誘われ、そして開いた。ところが二十数年たって、今度この町へきて、さて、どこで展覧会を開いたのかまるで記憶がない。教会のあるセントロに近いところだったことはまちがいない。広場に「島田正治展」と書いた横幕が張っており、またポスターも貼つてあつたりしたのと思う。メキシコも年々変っていく。まして、二、三十年もたつたら、もっともつとである。仕方ない。

ホテルを探すことになり、町の中を歩いた。以前に何度か泊まったホテルもどこにあるか思い出せない。町の中心から少し離れたところに大きなホテルがあつた。部屋は古く、もう五十年の歴史があるという。ここに泊まることに決めて部屋に入った。一番いい眺めのよいところのようだった。眼下にはバイエ・デ・ブラボーの家々がつづく。ここなら、いつきても、また絵が描けるなと思った。そして、ここには三泊した。

ひとつ不思議に思えたことがある。なかなか古い風情もあり、また部屋の数が四十近くあるにもかかわらず、この三日間に泊まった客はわずか一人だけ、一晩のみであった。これではたして経営がなりたっていくのだろうか。わたしたち二人だけがまさに独占しているようでもあつた。いかにもメキシコの田舎ののんびりした趣きそのものであつた。

・・・・次号につづく

ご意見・ご感想は
右上メールボタンよりお送りください。